

## &lt;書 評&gt;

キャサリン・A・クラフト

## 『日本人の9割が間違える英語表現100』

(筑摩書房, 2017年, 221頁)

軽部 恵子

英語はできるに越したことはない。世界第1位の経済大国アメリカの公用語は英語である。コモンウェルス（英連邦）に属す国は52にのぼる。世界で最も人口の多い中国やインドでは、エリートたちが英語を学び、英語圏の一流大学に留学することが多い。そして、電子メール、インターネット、SNSが世界中の人々に利用される今日、文字数の最も少ない英語のアルファベットは文字化けが起りにくく、キーボードに用いるのに最適の言語と言えよう。

一方、英語に限らず、外国語の習得は簡単ではない。母語でさえ、長年の勘違いや思い込みがある。日本語の場合、発音は比較的簡単なものの、漢字は日頃から練習していないと、すぐにあやふやになって書けなくなる。つまり、言語能力のレベルを維持するには、ネイティブ・スピーカーといえども、不断の努力が求められるのである。

それでは、英語はどのような勉強法が効果的なのか。インターネットのサーチエンジンに「英語学習法」の語句を入れて検索すると、日本人とネイティブ・スピーカーの双方による様々な提案が現れる。英語教授法には、英語のみを用いる方法、母語を用いて文法を説明しながら英語を母語に置き換

える方法、文法より会話に重視を置いた方法など多数存在する。もっとも、学習者のニーズや現在の言語能力のレベルは人によって異なるので、教授法の効果は人それぞれかもしれない。

それでも、英語上達の秘訣には概ね3つのポイントがあると言えよう。第1は、相手とコミュニケーションしたいという強い気持ちである。外国人から道を尋ねられ、十分答えられず残念だったという経験があれば、次は答えられるように表現を学びたいという気持ちが高まる。他方、高校の定期試験が迫っているから、あるいは大学入試の科目だからという理由のみでは、コミュニケーションの醍醐味は味わえず、学習者の気持ちはどこか冷めたものになるであろう。

第2は、学習者が母語をきちんと身に付けているか、とくに母語の文法を十分理解しているかが大きい。その理由は、母語の知識と対比させながら、外国語を学ぶことができるからである。第二外国語を習得する場合も同様である。第一外国語を習得していると、その経験と知識を生かして効率的に学ぶことができる。たとえば、大坂の適塾で緒方洪庵に蘭学を学び、オランダ語を習得していた福沢諭吉は、1859（安政6）年頃に横浜を訪れた際、外国人にオランダ語で話しかけても話が通じない、そして横文字の看板が読めないことに衝撃を受けた。横浜から戻った翌日、福沢は早速英語学習を始めたが、オランダ語の知識が役立ち、英語の習得が非常に速かったと言う（末延芳晴「慶應義塾大学部学部教授 永井荷風 知られざるもうひとつの顔 第一章 福沢諭吉 慶應義塾モダニズムの泉源（3）」、集英社新書WEB連載、2017年3月2日掲載、<http://shinsho.shueisha.co.jp/column/nagaikafu/004/>を参照）。ちなみに、英語はオランダ語およびドイツ語とともに西ゲルマン語派を構成する。また、古代ローマの共通語であったラテン語に源を有するロマンス語派のフランス語、イタリア語、スペイン語は、文法や重要単語の綴りと意味、名詞の性が非常に似ているので、3カ国語を一緒に学ぶ書籍（伊藤太吾『フランス語・イタリア語・スペイン語が同時に学べる本』、ナツ

メ社, 2006年)が出版されているほどである。

第3は、母語と異なる概念や異文化に対する学習者の興味関心である。学習者は、母語の発想に引きずられないよう、常に意識することが求められる。たとえば、日本語では「腹が立つ」「腹に据えかねる」など、感情を示すのに「腹」を使う表現が多いが、英語には日本語の「腹」に当たる単語はなく、stomach (胃, 腹部, 下腹など) やbelly (腹部, 胃, 胴など) を感情表現に使わない。それから、日本人は友人に待たされて少々迷惑だったときなど、「怒っている」を気軽に会話の中で使う傾向がある。たしかに、和英辞書を引くと「怒っている」はangryと出てくるが、たいしたことのない状況でこの語を使うと、相手に「逆ギレ」されるかもしれない。それぐらいangryは強い言葉である。

前置きが長くなったが、本書は前述の3つのポイントを一気に攻略してくれる好著である。著者のキャサリン・A・クラフトは、アメリカ中西部のミシガン州に生まれ、同じく中西部のオハイオ州で育った。オハイオ州の優れた公立大学ボウリング・グリーン州立大学 (Bowling Green State University) で学び、南山大学に交換留学生として来日した。日本在住が30年を超える著者は、通訳、翻訳家、英語講師として活動するかたわら、オンラインマガジン『ET PEOPLE! Online magazine for EFL/ESL students』(<https://www.et-people.com>) を発行する。

クラフトの著書には実用的なものが多く、和製英語を取り上げた『こまったカタカナ英語：つうじる英語に大変身!』(中央公論新社, 2013年)、ビジネスの場面で役立つ表現を集めた『仕事に効く! ずるい英語表現100』(宝島社, 2017年) などがある。著者は母語である英語の他、フランス語、イタリア語、ロシア語、日本語を学んでおり、日本語は大変流暢なのだが、本書は英語で執筆され、著述家の里中哲彦が編訳した (220頁)。

これまでに、英語学習法、とくに日本人が直面する困難について解説した書籍は数多く存在する。NPO法人連想出版が運営するサイト「風」の「日

本人と英語」([http://shinshomap.info/theme/english\\_for\\_japanese.html](http://shinshomap.info/theme/english_for_japanese.html))に詳しく紹介されているが、ロングセラーの1つは、アメリカ・ウィスコンシン州生まれで、30年以上明治大学政治経済学部で教鞭を執ったマーク・ピーターセンの『日本人の英語』(岩波書店、1988年)である。同氏は『なぜ、その英語では通じないのか?』(集英社インターナショナル、2016年)も出版した。ただし、『なぜ〜』は文法、語彙の違いなど詳細な解説が多く、英語教員を目指す人には必携だが、とにかく苦手意識を克服したいという人にはやや詳しすぎるきらいがある。

その点、クラフトの著作は1項目が見開き2頁でまとめられており、各項目の例文と解説は多すぎず・少なすぎずというほどよい分量になっている。100の表現はとても習得できないと考える人がいるかもしれないが、とりあえず気になった項目、今すぐ使いたい言い回しから見ていけばよい。完璧に理解した項目の目次に印を付けていくのも、楽しい読書法である。本書は、英語が苦手という人が少しずつ勉強するためにも、英語の得意な人が自分の知識を再確認するためにも、手元に置きたい本である。

本書の中身を具体的に見ていこう。「ペットを飼う」の動詞に日本人はkeepを使いたがるが、英語ではhaveを用いる。英語でkeepは「養う・育てる」(raise)となり、世話をする行為、すなわち餌やりや糞の後始末を指すことが多い(146頁)。

前置詞によってニュアンスの違いを出すのは、日本語で助詞を使い分けることに近いが、これも難しい点である。真実を突き止めるのは、findではなくfind outである(151頁)。読む時ならすぐにニュアンスを理解できるかもしれないが、会話でfindの後にoutがすんなりと出てくるかはわからない。あるいは、会話の相手がfind outとoutを付けたのに、こちらに聞き取る余裕がなく、その深意をくみ取れないかもしれない。ビジネスの交渉で落としどころを探るとき、あるいは文章の行間を読むためにも、前置詞には敏感でありたい。

和製英語も、日本人が気を付けなければならない点である。「リストラ」は本来、restructuring（再編成，構造改革）の意だが，日本では「解雇する」(lay off)の意味で使われることが圧倒的に多い（156頁）。一方，「スマート」はかつて痩せていることを意味していたが，最近ではスマートフォンのおかげで，英語本来の意味に戻ってきた（188頁）。

教員として気を付けたいのは，配布物を意味する語句である。日本語では「プリント」を用いるが，英語ではhandoutとなる（194-195頁）。プリントには「跡」の概念が含まれており，指紋（fingerprint），足跡（footprint）などとセットで覚えれば，間違えにくくなるであろう。

それから，日本語にあっても英語にない概念が少なくない。典型的なものの1つが「社会人」である（166頁）。基本的に，18歳になったら進学・就職等で親の住居から出て行く欧米の若者と異なり，日本では成年に達した子の多くが親と同居している。その背景には，家を継ぐ意識もさることながら，非正規雇用の増大など不安定な雇用情勢から，経済的に親と同居せざるを得ない独身の子が増えていることが挙げられる。いずれにしても，日本で「社会に出る」ことは，必ずしも親の家を出ることではないのであろう。もっとも，2008年の世界金融危機以降，大学卒業までに職を見つけられず，親元に戻って就職活動をする若者が欧米で増えたので，成人した子が親と暮らすことに抵抗感がなくなっていくかもしれない（Drew Desilver, "In the U.S. and abroad, more young adults are living with their parents," May 24, 2016, Pew Research Center, <http://www.pewresearch.org/fact-tank/2016/05/24/in-the-u-s-and-abroad-more-young-adults-are-living-with-their-parents/>を参照）。

このように，本書は語学としての英語のみならず，英語の発想法，文化・慣習など，様々なことを教えてくれる。英語学習の副読本にとどめるのもったいない。いっそ，教科書にしてはどうか。学生の視点に立ったとき，1項目を見開き2頁で学習していくと，学習の成果を視覚化しやすい。

そして、解説で挙げられている例文と語彙について教員が補足説明すれば、立派な異文化体験と地域研究の講義となりえる。その際は、鈴木孝夫『ことばと文化』（岩波書店、1973年）、同『日本語と外国語』（岩波書店、1990年）、今井むつみ『ことばと思考』（岩波書店、2010年）などを合わせて用いると、教員にとっても学習者にとっても、講義内容がいつそう深まるであろう。これらの文献はいずれも新書なので、価格・レベル・分量のいずれの面でも、学習者にとって手にとりやすい。

本書を読了した人には、中山裕木子『会話もメールも英語は3語で伝わります』（ダイヤモンド社、2016年）を勧めたい。たとえば、自分の職業を説明するのに、日本人は「私の仕事は英語教師です」（My job is an English teacher.）と言いがちだが、ネイティブ・スピーカーは“I teach English.”とストレートに言う。3語、すなわちSVO（主語+動詞+目的語）で伝える方法を学ぶと、本書で学んだ英語の発想法を再確認できるであろう。

また、マヤ・バーダマン『英語のお手本：そのままマネしたい「敬語」集』（朝日新聞出版、2015年）も勧めたい。メールの書き方、問い合わせ、電話対応、謝罪、確認・催促など、日本語でもどう言うべきか悩む言い回しが懇切丁寧に解説されており、文字通り今日からすぐに使える例文が満載である。英語の丁寧な表現は、日本語の敬語のように動詞自体を変える（例 食う、召し上がる、いただく）のではなく、仮定法を用いることが多い。仮定法はグローバル時代のビジネスパーソンに不可欠の英語力である。英語においても、相手の状況を気遣いつつ、自分の状況と要望を明確に伝える礼儀正しい文章を書けることが、成功の秘訣となる。そうすれば、アメリカ人は率直な言い方を好むと思うあまり、アメリカ人でもしないようなきつい物言いをする失敗を防げる。

最後に、幕末に日本人が英語を使った際のエピソードを紹介したい。1853年にペリーが浦賀へ来航した際、浦賀奉行所の船に当番与力だった中島三郎助等とオランダ通詞の堀達之助が乗り、旗艦サスケハナ号に横付けした。艦

上の中国語通訳ウィリアムスとオランダ語通訳ポートマンが、「ペリー提督は最高位の役人以外は会わない」と追い返そうとしたが、堀が“I can speak Dutch.”と呼びかけ、交渉の糸口をつかんだ(松本健一『開国・維新1853~1871』, 日本の近代 1, 中央公論社, 1998年, 10-11頁)。まさに、SVOを地で行く、簡潔で力強い文である。正確には、助動詞のcanが入るので、4語であるが。ちなみに、オランダ通詞の堀が英語を話せたのは、1808年のフェートン号事件(英国軍艦フェートン号がオランダ船を捕獲すべく長崎港に侵入した事件)以来、長崎のオランダ通詞たちが英語を学んできた成果である(国立国会図書館「江戸時代の日蘭交流 第2部 トピックで見る 3. オランダ語の学習」, [http://www.ndl.go.jp/nichiran/s2/s2\\_3.html](http://www.ndl.go.jp/nichiran/s2/s2_3.html)を参照)。ペリー来航時の通詞については種々の参考文献に書かれているが、堀達之助の子孫で、名古屋学院大学名誉教授の堀孝彦が、日本通訳翻訳学会第10回年次大会(2009年)で行った基調講演のURLを付しておく(<http://jaits.jp.org/home/kaishi2009/pdf/01-kouen.pdf>)。